

平成28年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT28044 プログラム名 音楽で学ぶ青森の近代—幕末明治の音楽を体験しよう—



開催日：平成28年9月4日(日)

実施機関：青森中央学院大学

(実施場所) (2号館)

実施代表者：北原 かな子

(所属・職名) (看護学部・教授)

受講生：高校生23名

関連URL:

【実施内容】

＜プログラムを留意、工夫した点＞

- ・参加者が初顔合わせであることから、演奏体験は午前を器楽、午後を声楽にした。お昼をはさんで交流ができた午後の方が声を出しやすいという配慮である。また講義内容は、近世から近代へ内容を時系列で構成した。
- ・午前の講義内容を理解してもらう上で、「琴(きん)」と「箏(そう)」を並べて、具体的な違いを比較できるようにした。
- ・音楽の歴史や地元の歴史は、教科書の日本史にあまりでてこないことから、日本史の既習事項との関連を適宜交えつつ説明した。その際に、これまで科研費により収集した資料の画像をできるだけパワーポイントで見てもらい、またCDの音楽資料も活用して、視覚と聴覚からの理解をはかった。
- ・講義の中に研究の経緯や科研調査時のエピソードなどを織り込み、歴史研究の楽しさを理解してもらえるように努力した。
- ・実際の講義資料の他に、当日の講義内容全体像を簡潔にまとめた配布資料を作成した。そこに受講生が自分で調べる手がかりになるように、参考資料も掲載した。
- ・補助の学生にも演奏体験に参加してもらい、お昼の食事時間も積極的に高校生に声をかけてもらうことで、受講生の円滑なコミュニケーションができるようにした。
- ・お昼休みにも自由に楽器に触れることができるようにして、楽しめる雰囲気作りに努力した。

＜当日のスケジュール＞

- 09:40-10:00 受付
- 10:00-10:20 開校式(科研費の説明)
- 10:20-11:00 講義1 サムライが学んだ中国の音楽—思想を理解するための楽器・琴—  
(休憩15分)
- 11:15-12:00 演奏体験1 琴と箏を演奏してみよう
- 12:00-13:00 昼食・休憩
- 13:00-13:40 講義2 津軽の文明開化と音楽—明治天皇を驚かせた青森での男声合唱—  
(休憩10分)

13:50-14:30 演奏体験2 唱歌と賛美歌を歌ってみよう  
14:40-15:10 クッキータイム・ディスカッション  
15:20-15:40 修了式  
15:40 終了・解散

各講義で多少の遅れはあったが、ほぼ予定通りに進行し、予定時間を超えずに修了した。

### <実施の様子>

#### 1. 午前講義の部「サムライが学んだ中国の音楽—思想を理解するための楽器・琴—」

「江戸時代の侍はどのような音楽を学習・演奏していたのだろうか？」との課題意識を持ち、儒学の実践としての音楽学習や儒学と関係深い「琴（きん）」について学んだ。特に科研費調査で明らかになった弘前藩での「琴」関連資料の説明も交え、地元の歴史との関連についても学習した。また、「琴（きん）」と「箏（そう）」を並べて、音色や演奏方法の違いを視覚・聴覚から具体的に確認した。



#### 午前演奏体験の部

続いて、休憩時間をはさんで演奏体験を行った。「武士たちが学習・愛好していた琴という楽器を体験しよう」とのサブテーマのもとで、最初に楽譜の読み方を学び、次に実際の琴の演奏に挑戦した。最後に講師の演奏により、琴の名曲である「流水」の演奏を楽しんだ。



## 2. 午後講義の部「津軽の文明開化と音楽—明治天皇を驚かせた青森での男声合唱—」

「青森の近代を考えてみよう」とのサブテーマにより、青森での文明開化とはどのような状況であったのか、その特徴と、当時の日本に洋楽が入った経緯について学んだ。次いで明治9年7月15日に当時の青森小学校で行われた明治天皇天覧授業で、東奥義塾の生徒たちが西洋音楽の曲を歌った時の様子を、科研費による新発掘資料をもとに学んだ。特に音楽については、青森県出身である「羽仁もと子」のエピソードから当時の日本人にとって、西洋音楽の歌唱がどう難しかったのかを考えてみた。最後に、弘前出身で、洋楽普及・邦楽保存に努めた楠美家の人々の足跡を学んだ。



### 午後演奏体験の部

サブテーマを「明治の学校音楽を体感しよう！」として、日本で最初に刊行された音楽教科書の中から、最初の数曲や、23番の「君が代」を講師のピアノとCDの演奏で聴いてみるとともに、「蛍」を4番まで通して歌い、明治の学校音楽の様子を体験した。

## 3. 修了式

クッキータイムで、自由にディスカッションを行ったあと、修了式となった。受講生一人一人に「未来博士号」を授与し、すべての行事を終えたのちに、参加者全員で記念撮影を行い、終了した。



### <事務局との協力体制>

日本学術振興会との連絡、調整、提出書類の確認、委託費の管理、及び、参加者への連絡等の事務手続き全般は、事務局研究支援・地域連携課が主に行った。また、広報は事務局学園広報室が担当し、大学ホームページ上で最新情報を随時リリースした。いずれも、実施代表者と緊密に連絡をとり、情報や認識を共有しながら進めた。そのため、実施代表者・実施分担者は授業の準備・実施に専念することができた。

### <広報活動>

- 1) 印刷物：ポスター・チラシ及び配布資料は、本プログラムの実施内容を効果的に伝えられるよう、デザイン性を重視して作成した。
- 2) チラシ・ポスターによる広報：青森市内及び近隣市町村の中学・高等学校に送付した。
- 3) 大学ホームページでの広報：「ひらめき☆ときめきサイエンス」特設ページを設けるとともに、最短でのアクセスを容易にするためにトップページにバナーを設置した。

4) SNS での広報:実施代表者の facebook など周知を行った。

5) 高校の音楽担当教員への広報: 広く一般に案内すると同時に、本プログラムの趣旨から、青森県高校文化連盟の諸先生(県立学校長)や、中でも音楽部門担当の先生たちに特に集中的に PR 活動を行った。その結果、高校の合唱部や箏曲部をはじめとする音楽に関心の高い生徒が集まり、大変効果があった。

#### <安全配慮>

人体に直接危険をもたらすようなプログラムではないが、保険加入をはじめ参加者の安全を確保する体制を整えて実施した。当日は天候に恵まれ比較的気温が高かったが、プログラムを通じて空調設備の整った屋内教室での実施であったことと、適宜休憩を入れ、昼食・クッキータイムには飲み物を摂ってもらったこと、さらに、3~4名の受講生に対し実施協力者を1名配置し気を配ったことから、熱中症等の体調不良者が出ることはなかった。

#### <今後の発展性、課題>

音を交えて歴史を考える試みは今回が初めてで、試行錯誤の連続であった。しかし実施後のアンケートによると、普段接することのない楽器に触れた楽しさに加えて、郷土の歴史に興味を持ったという感想が多く寄せられており、本来の目的であった「音を通して青森の近代を学ぶ」ことについては一応の成果を見たのではないかと考えている。青森に限らず、近代日本の西洋音楽普及過程において、賛美歌の歌唱行動が重要であることは言うまでもない。今回はプロテスタントの賛美歌中心で構成したが、今後ハリストス正教の賛美歌なども含めて、さまざまな文化活動の体験を工夫することで、地域の歴史理解を図っていきたい。

また、今回の企画にあたり、告知や参加者の募集では、地元の高校の先生たちから多大な協力を頂くことができた。今後も研究成果を高校生など若い世代に伝える機会をつくるためにも、今回築いたネットワークをさらに強化して、連携を図っていききたいと考えている。

#### 【実施分担者】

三國 裕子 看護学部・准教授

齋藤 美紀子 看護学部・准教授

藤澤 珠織 看護学部・講師

【実施協力者】 7 名

#### 【事務担当者】

佐藤 菜穂子 研究支援・地域連携課 職員